張紅倫

新美南吉

一

奉天大戦争（一九〇五年）の数日まえの、ある夜中のことでした。わがある部隊の大隊長青木少佐は、畑の中に立っている歩哨を見まわって歩きました。歩哨

は、めいぜられた地点に石のようにつっ立って、きびしい寒さと、ねむさをがまんしながら、警備についているのでした。

「第三歩哨、異状はないか」

少佐は小さく声をかけました。

「はっ、異状ありません」

歩哨のへんじが、あたりの空気に、ひくく、こだましました。少佐は、また、歩きだしました。

頭の上で、小さな星が一つ、かすかにまたたいています。少佐はその光をあおぎながら、足音をぬすんで歩きつづけました。

もうすこしいくと、つぎの歩哨のかげが見えようと思われるところで、少佐はどかりと足をふみはずして、こおった土くれをかぶりながら、がたがたがた、どすんと、深いあなの中に落ちこみました。

ふいをくった少佐は、しばらくあなのそこでぼんやりしていましたが、あたりのやみに目もなれ、気もおちついてくると、あなの中のようすがうすうすわかってきました。それは四メートル以上の深さで、そこのほうがひろがっている、水のかれた古井戸だったのです。

少佐は、声を出して歩哨（ほしょう）をよぼうとしましたが、ま

てまて、深い井戸の中のことだから、歩哨のいるところまで、声がとおるかどうかわからない、それに、もし、ロシアの斥候（せっこう）にききつけられたら、むざむざところされるにきまっている、と思いかえし、そのまま、だまってこしをおろしました。

あすの朝になったら、だれかがさがしあてて、ひきあげてくれるだろうと考えながら、まるい井戸の口でしきられた星空を見つめていました。そのうちに、井戸の中があんがいあたたかなので、うとうととねむりだしました。

ふとめざめたときは、もう夜があけていました。少

佐はうんとあくびをしながら、赤くかがやいた空を見あげたのち、

「ちょっ、どうしたらいいかな」

と、心の中でつぶやきました。

まもなく、朝やけで赤かった空は、コバルト色になり、やがて、こい水色にかわっていきました。少佐は、だれかさがし出してくれないものかと、待ちあぐんでいましたが、だれもここに井戸があることさえ、気がつかないらしいけはいです。上を見ると、長いのや、みじかいのや、いろいろの形をしたきれぎれの雲が、あとから、あとからと、白く通っていくきりです。

とうとうお昼近くになりました。青木少佐ははらもへり、のどがかわいてきました。とてもじれったくなって、大声で、オーイ、オーイと、いくどもどなってみました。しかし、じぶんの声がかべにひびくだけで、だれもへんじをしてくれるものはありません。

少佐は、しかたなく、むだだとは知りながら、なんどもなんども、井戸の口からさがったつる草のはしにとびつこうとしました。やがて、「あああ」と、つかれはてて、べったりと井戸のそこにすわりこんでしまいました。

そのうちに、とうとう日がくれて、寒いよいやみが

せまってきました。ゆうべの小さな星が、おなじところでさびしく光っています。

「おれは、このまま死んでしまうかもしれないぞ」

と、少佐は、ふと、こんなことを考えました。

「じぶんは、いまさら死をおそれはしない。しかし、戦争に加わっていながら、こんな古井戸の中でのたれ死にをするのは、いかにもいまいましい。死ぬなら、敵のたまにあたって、はなばなしく死にたいなあ」

と、こうも思いました。

まもなく少佐は、つかれと空腹のために、ねむりにおちいりました。それは、ねむりといえばねむりでし

たが、ほとんど気絶したもおなじようなものでした。
それからいく時間たったでしょう。少佐の耳に、ふと、人の声がきこえてきました。しかし、少佐はまだ半分うとうととして、はっきりめざめることができませんでした。
「ははあ、地獄から、おにがむかえにきたのかな」
少佐は、そんなことを、ゆめのように考えていました。すると、耳もとの人声がだんだんはっきりしてきました。
「しっかりなさい」
と、中国語でいいます。

少佐は、中国語をすこし知っていました。そのことばで、びっくりして目をひらきました。

「気がつきましたか。たすけてあげます」

と、そばに立っていた男が、こういってだきおこしてくれました。

「ありがとう、ありがとう」

と、少佐はこたえようとしましたが、のどがこわばって、声が出ません。

男は、井戸の口からつりさげたなわのはしで、少佐の胴体（どうたい）をしばっておいて、じぶんがさきにそのなわにつかまってのぼり、それから、なわをたぐって、少佐

を井戸の外へひきあげました。少佐は、ぎらぎらした昼の天地が目にはいるといっしょに、ああ、たすかったと思いましたが、そのまま、また、気をうしなってしまいました。

二

少佐がかつぎこまれたのは、ほったて小屋のようにみすぼらしい、中国人の百しょうの家で、張魚凱（ちょうぎょがい）というおやじさんと、張紅倫（ちょうこうりん）というむすことふたりきりの、まずしいくらしでした。

あい色の中国服をきた十三、四の少年の紅倫は、少佐のまくらもとにすわって、看護してくれました。紅倫は、大きなどんぶりに、きれいな水をいっぱいくんでもってきて、いいました。

「わたしが、あの畑の道を通りかかると、人のうめき声がきこえました。おかしいなと思ってあたりをさがしまわっていたら、井戸のそこにあなたがたおれていたので、走ってかえって、おとうさんにいったんです。それから、おとうさんとわたしとで、なわをもっていって、ひきあげたのです」

紅倫(こうりん)はうれしそうに目をかがやかしながら話しまし

た。少佐はどんぶりの水をごくごくのんでは、うむうむと、いちいち感謝をこめてうなずきました。

それから、紅倫は、日本のことをいろいろたずねました。少佐が、内地に待っている、紅倫とおない年くらいのじぶんの子どものことを話してやると、紅倫はたいへんよろこびました。わたしも日本へいってみたい、そして、あなたのお子さんとお友だちになりたいと、いいました。少佐はこんな話をするたびに、日本のことを思いうかべては、小さなまどから、うらの畑のむこうを見つめました。外では、遠くで、ドドン、ドドンと、砲声がひっきりなしにきこえました。

そのまま四、五日たった、ある夕がたのことでした。もう戦いもすんだのか、砲声もぱったりやみました。まどから見える空がまっかにやけて、へんにさびしいながめでした。いちんち畑ではたらいていた張魚凱（ちょうぎょがい）が、かえってきました。そして少佐のまくらもとにそそくさとすわりこんで、

「こまったことになりました。村のやつらが、あなたをロシア兵に売ろうといいます。こんばん、みんなで、あなたをつかまえにくるらしいです。早くここをにげてください。まだ動くにはごむりでしょうが、一刻もぐずぐずしてはいられません。早くしてください。

早く」

と、せきたてます。

少佐は、もうどうやら歩けそうなので、これまでの礼をあつくのべ、てばやく服装をととのえて、紅倫（こうりん）の家を出ました。畑道に出て、ふりかえってみると、紅倫がせど口から顔を出して、さびしそうに少佐のほうを見つめていました。少佐はまた、ひきかえしていって、大きな懐中時計（かいちゅうどけい）をはずして、紅倫の手ににぎらせました。

だんだん暗くなっていく畑の上を、少佐は、身をかがめて、奉天をめあてに、野ねずみのようにかけてい

きました。

三

戦争がおわって、少佐も内地へかえりました。その後、少佐は退役して、ある都会の会社につとめました。少佐は、たびたび張(ちょう)親子を思い出して、人びとにその話をしました。張親子へはなんべんも手紙を送りました。けれども、先方ではそれが読めなかったのか、一どもへんじをくれませんでした。

戦争がすんでから、十年もたちました。少佐は、そ

の会社の、かなり上役（うわやく）になり、むすこさんもりっぱな青年になりました。紅倫（こうりん）もきっと、たくましいわかものになったことだろうと、少佐はよくいいいいしました。

　ある日の午後、会社の事務室へ、年わかい中国人がやってきました。青い服に、麻（あさ）のあみぐつをはいて、うでにバスケットをさげていました。

「こんにちは。万年筆いかが」

と、バスケットをあけて、受付の男の前につきだしました。

「いらんよ」

と受付の男は、うるさそうにはねつけました。

「墨いかが」

「墨も筆もいらん。たくさんあるんだ」

と、そのとき、おくのほうから青木少佐が出てきました。

「おい、万年筆を買ってやろう」

と、少佐はいいました。

「万年筆やすい」

あたりで仕事をしていた人も、少佐が万年筆を買うといいだしたので、ふたりのまわりによりたかってきました。いろんな万年筆を少佐が手にとって見ている

あいだ、中国人は、少佐の顔をじっと見まもっていました。

「これを一本もらうよ。いくらだい」

「一円と二十銭」

少佐は金入れから、銀貨を出してわたしました。中国人はバスケットの始末をして、ていねいにおじぎをして、出ていこうとしました。そのとき、中国人は、ポケットから懐中時計(どけい)をつまみ出して、時間を見ました。少佐は、ふとそれに目をとめて、

「あ、ちょっと待ちたまえ。その時計を見せてくれないか」

「とけい？」
中国人は、なぜそんなことをいうのか、ふにおちないようすで、おずおずさし出しました。少佐が手にとってみますと、それは、たしかに、十年まえ、じぶんが張紅倫（ちょうこうりん）にやった時計です。
「きみ、張紅倫というんじゃないかい」
「えっ！」と、中国人のわかものは、びっくりしたようにいいましたが、すぐ、「わたし、張紅倫ない」と、くびをふりました。
「いや、きみは紅倫君だろう。わしが古井戸の中に落ちたのを、すくってくれたことを、おぼえているだ

ろう？　わしは、わかれるとき、この時計をきみにやったんだ」
「わたし、紅倫ない。あなたのようなえらい人、あなに落ちることない」
といってききません。
「じゃあ、この時計はどうして手に入れたんだ」
「買った」
「買った？　買ったのか。そうか。それにしてもよくにた時計があるもんだな。ともかくきみは紅倫にそっくりだよ。へんだね。いや、失礼、よびとめちゃって」

「さよなら」

中国人はもう一ぺん、ぺこんとおじぎをして、出ていきました。

そのよく日、会社へ、少佐にあてて無名の手紙がきました。あけてみますと、読みにくい中国語で、

『わたくしは紅倫です。あの古井戸からおすくいしてから、もう十年もすぎましたこんにち、あなたにおあいするなんて、ゆめのような気がしました。よく、わたくしをおわすれにならないでいてくださいました。わたくしの父はさく年死にました。わたくしはあなたとお話がしたい。けれど、お話したら、中国人のわた

くしに、軍人だったあなたが古井戸の中からすくわれたことがわかると、今の日本では、あなたのお名まえにかかわるでしょう。だから、わたくしはあなたにうそをつきました。わたくしは、あすは、中国へかえることにしていたところです。さよなら、おだいじに。さよなら』

と、だいたい、そういう意味のことが書いてありました。

[＃入力者註：底本では「中国」「支那」が共に使われ

ているが、「中国」に統一した。］
［＃混用すると作者の意図と別の意味が生じると思われるからである。］
［＃また、書かれた時代から考えると「支那」で統一すべきかもしれないが、］
［＃この童話を今読むためには「中国」が良いだろうと考えた。］

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店
１９６８（昭和43）年２月20日初版発行
１９７４（昭和49）年１月30日12版発行
入力：もりみつじゅんじ
校正：渥美浩子
ファイル作成：もりみつじゅんじ
１９９９年７月４日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。